

一般国道10号宮崎西バイパス事業に伴う発掘調査報告書

NISHI HARU
西ノ原遺跡
OO YODO
— 大淀1号古墳 —

1988

宮崎県教育委員会

一般国道10号宮崎西バイパス事業に伴う発掘調査報告書

NISHI HARU
西ノ原遺跡
OO YODO
— 大淀1号古墳 —

1988

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、昭和62年度に建設省の委託を受け一般国道10号
宮崎西バイパス事業に伴う西ノ原遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では県指定史跡大淀1号古墳の隣接地の発掘調査を行い、既に削平
されていたと思われていた大淀1号古墳の南側に墳丘の基底部を良好な状
態で確認することができました。これによって、これまで前方後円墳とも
言われていた大淀1号古墳を円墳と確認する貴重な資料が得られました。

発掘調査の報告書としては決して満足いくものではありませんが、この
報告書が専門の研究者だけでなく学校教育や社会教育の面にも広く活用さ
れるとともに、埋蔵文化財に対する認識と理解のための一助となることを
期待します。

昭和63年12月

宮崎県教育委員会

教育長 児玉郁夫

例　　言

1. 本書は、昭和62年度に建設省九州建設局宮崎工事事務所の委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した一般国道10号宮崎西バイパス事業に伴う西ノ原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 西ノ原遺跡は、宮崎市大塚町西ノ原1287番地8号外に所在する。
3. 発掘調査は昭和62年5月18日から同6月18日まで実施した。また、同7月13日から同7月23日までの期間と昭和63年3月9日から同3月11日までの期間に関連調査及び補足調査を実施した。
4. 本書の執筆・編集は永友良典が行った。また、遺構等の測量・実測は永友、長津宗重、近藤協、北郷泰道を行い、遺物実測と遺構遺物のトレース及び写真撮影は永友が行った。
5. 出土遺物については、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第1章 序 説	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査組織	2
第3節 遺跡の位置と環境	2
第2章 発掘調査の結果	6
第1節 大淀1号古墳の概要	6
第2節 調査の経過	8
第3節 遺構と遺物	9
1. 墳丘基底部の状態	9
2. 土層の状態	9
3. 遺 物	13
第3章 結 論	13

挿図目次

第1図 遺跡分布図	3
第2図 地形図	5
第3図 確認調査トレント図	7
第4図 確認調査主体部遺構実測図及び主体部土層図	7
第5図 トレント配置図	8
第6図 遺構（基底部）実測図及び断面図	9
第7図 大淀1号古墳墳丘現況図	10
第8図 大淀1号古墳墳丘土層図	11~12
第9図 遺物実測図	13

図版目次

図版 1	大淀 1 号古墳埴丘土層堆積状況	15
図版 2	大淀 1 号古墳及び調査区（南西から）	16
	大淀 1 号古墳及び調査区（東から）	16
図版 3	埴丘基底部検出状況（東側）	17
	埴丘基底部検出状況（西側）	17
図版 4	調査風景	18
図版 5	出土遺物	19
	大淀 1 号古墳埴丘断面補修作業	19
	大淀 1 号古墳埴丘断面補修状況	19

第1章 序 説

第1節 調査の経緯

県都宮崎市は、近年、人口の集中化が進み郊外に大規模な住宅団地が相次いで建設されてきた。市中心地とは大淀川を挟んで西岸に位置する大塚地区周辺にも、昭和40年代頃から団地造成が始まり、桜ヶ丘、大塚台、小松台、生目台などの住宅団地が建設され発展してきた。しかし、市中心部とは大淀川によって分断されているため、唯一の道路である国道10号線の通行量が年々増し、交通渋滞の解消が急務とされていた。そのため、建設省では国道10号線のバイパスとして宮崎大橋の橋梁工事や国道拡幅工事を含めた宮崎市出来床から同富吉に至る延長5.3kmの宮崎西バイパスの建設事業を昭和49年度に着手し、昭和58年度から一部工事を開始している。

事業区域周辺の宮崎市大塚町原から同西ノ原一帯には昭和12年指定の県史跡大淀古墳が点在しており、工事計画では、西ノ原交差点付近の工事予定区北側に隣接する大淀1号古墳の一部に影響を受ける計画となっていた。大淀1号古墳は昭和初期の国道拡張の際に前方部が完全に削平されたため、後円部を円墳として指定したという古墳である。昭和57年11月に宮崎市教育委員会が周辺の急激な開発に対するために古墳の性格と規模を確認して今後の保存等の資料にする目的で現状変更の確認調査を実施し、墳頂部で粘土層を検出している。現況は国道側の約5分の1がほぼ垂直に削られており半月形に近い状態であったが、道路拡張がこの削平部分に及ぶため、昭和61年10月から建設省九州地方建設局宮崎工事事務所と県文化課と協議を重ねた結果、昭和62年3月2日付け建九宮二調第12号で建設省九州地方建設局宮崎工事事務所から出された工事通知に対して、県文化課では昭和62年3月16日付け108-18-31号で工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。調査は建設省からの委託事業として県教育委員会が行うこととし、昭和62年4月20日付けで建設省九州地方建設局宮崎工事事務所との間で契約書を締結した。

発掘調査は宮崎市大塚町西ノ原1287番地8号外の約300m²を調査対象区として昭和62年5月18日から6月18日にかけて約20日間実施した。さらに、関連調査として7月13日から7月23日にかけて大淀1号古墳の墳丘測量を行い、周辺部工事終了後の昭和63年3月9日から3月11日にかけて道路側の古墳断面の土層実測と壁面の補修作業を合わせて行った。

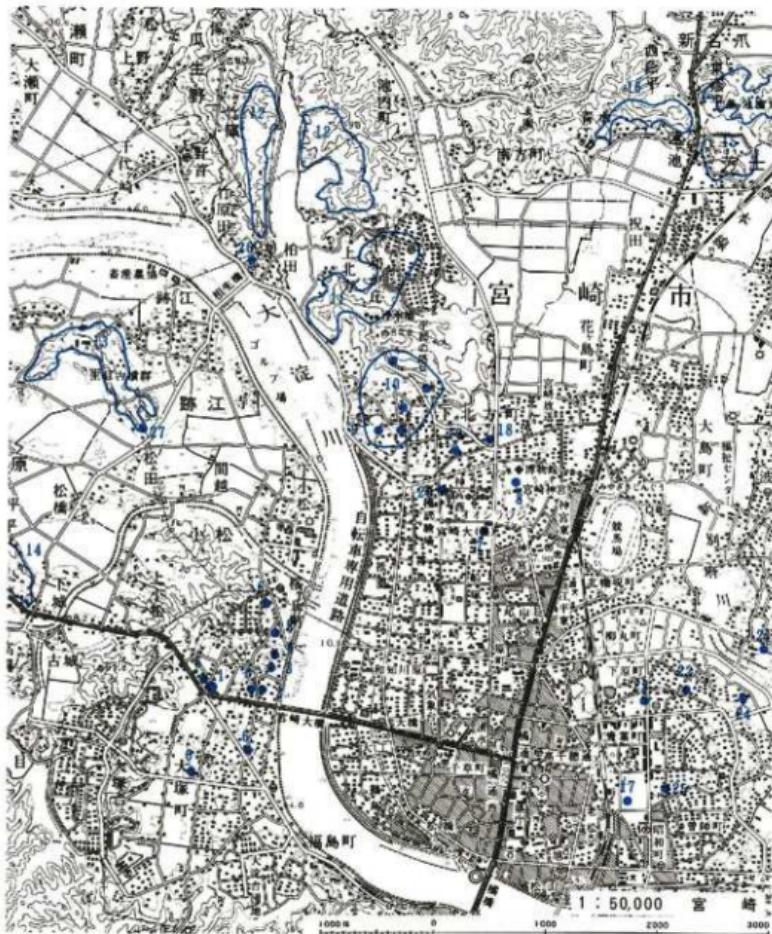
第2節 調査組織

調査組織は次のとおりである。

事業主体	建設省九州建設局宮崎工事事務所
所長	古川恒雄
調査主体	宮崎県教育委員会
教育長	船木 哲
文化課長	水井初志
同課長補佐	梨岡 孝
同庶務係長	H高達男
同埋蔵文化財係長	丸目恵教
同主任主事（調査担当）	永友良典

第3節 遺跡の位置と環境

大淀1号古墳の所在する西ノ原遺跡は大淀川下流域右岸の宮崎平野低地に位置する。地形的には大塚地区から小松地区へ大淀川西岸に隣接しながら北に延びる標高60mの丘陵地東辺の標高7mの微高地となっている。大淀1号古墳の所属する大淀古墳群は前方後円墳3基、円墳3基、横穴墓1基から構成されており、昭和12年に県史跡に指定されている。大淀古墳群に対する発掘調査はほとんど行われていなかったが、昭和62年に県文化課が行った街路生目通線改良工事に伴い大淀3号墳の調査を行っている。⁽¹⁾ 大淀3号古墳は大淀1号墳の東約500mの所、国道から北へ延びる県道北俣宮崎線沿いの微高地に位置しており、後円部のみ残存する前方後円墳である。調査の結果、後円部を円形に巡る幅9mの周溝が確認され、周溝からは底部穿孔の二重口縁壺が出土しており全長100m級の規模を持つ4世紀末の前方後円墳と確認された。また、今回調査の大淀1号古墳は直径27mの円墳で、昭和57年に宮崎市教育委員会が行った確認調査では粘土壠の痕跡が確認された。さらに、街路生目通線改良工事に伴う発掘調査では、大淀3号古墳から100~200m北へいった微高地に立地する権現昔遺跡、⁽¹⁾ 多宝寺遺跡、竹ノ下遺跡の3遺跡も昭和62年~63年にかけて調査された。権現昔遺跡からは弥生時代後期の堅穴様遺構と中世の溝状遺構が確認された。多宝寺遺跡からは古墳時代後期⁽²⁾ の堅穴住居跡5軒と土壙2基が、竹ノ下遺跡からも古墳時代後期の堅穴住居跡10軒が確認された。このように、大淀1号古墳周辺では大淀古墳群を中心として古墳時代の様相がここ1、



1. 大淀1号古墳(西ノ原遺跡)
2. 大淀3号古墳
3. 穂現昔遺跡
4. 多宝寺遺跡
5. 竹ノ下遺跡
6. 大淀古墳群
7. 船塚遺跡
8. 船塚古墳
9. 下北方地下式横穴墓群
10. 下北方古墳群
11. 池内横穴墓群
12. 瓜生野横穴墓群
13. 生目古墳群
14. 生目横穴墓群
15. 蓬ヶ池横穴墓群
16. 住吉横穴墓群
17. 净土江遺跡
18. 宮大茶園遺跡
19. 大宮中学校遺跡
20. 宮大農園遺跡
21. 椿遺跡
22. 引土遺跡
23. 庵ノ山遺跡
24. 椿小学校遺跡
25. 曾師遺跡
26. 柏田貝塚
27. 錦江貝塚

第1図 遺跡分布図

2年の発掘調査を通じて徐々に明らかになってきている。

さらに、周辺地域の古墳時代の状況について述べると、大淀古墳群から北西2～3kmの同じ大淀川右岸の標高約20mの独立丘陵上には4世紀後半から6世紀後半に造営された前方後円墳8基、円墳22基、横穴墓9基から構成される生日古墳群が分布する。主軸長143mの3号古墳を含め100m級の前方後円墳3基をもつ古墳群である。対岸の大淀川左岸の標高40～50mの段丘上には5世紀後半から6世紀後半にかけて造営された前方後円墳4基、円墳12基、地下式横穴墓9基から構成される下北方古墳群が分布する。下北方古墳群については昭和26年(3)に日向遺跡調査団によって前方後円墳1基と円墳2基が調査されている。このうち13号古墳は前方部を2段、後円部を3段に築成した主軸長110mの前方後円墳で円筒埴輪と人物・器材・馬などの形象埴輪の破片が出土した。また、地下式横穴墓に対する発掘調査は昭和50年と57年に宮崎市教育委員会によって行われ、特に、昭和50年に調査した5号地下式横穴墓は9号古墳(円墳)の墳丘下に掘り込んでおり、副葬品として横矧板鉢留短甲、三角板鉢留短甲、頬甲、眉底付胄、鐵劍、直刀、鐵鉢、鐵鎗、変形獸形鏡、変形紋鏡、勾玉、管玉、変形半円玉、金製垂飾付耳飾、鞍金具、鏡、杏葉、轡鏡板、三環鏡、馬鐸、手斧、のみ状鉄器、カギ状鉄器、鎌が確認された。

(4)
左岸域の沖積平野部では、下北方古墳群の南側に船塚古墳が所在する。船塚古墳は主軸長76.8m、後円部径38m、前方部幅47mを測り、周濠を巡らす前方後円墳である。その南西には埴輪小片が発掘調査によって見出された船塚遺跡がある。さらに、下北方古墳群の分布する丘陵の北側東斜面には池内横穴墓群(50基を超える横穴墓)、西側丘陵には瓜生野古墳が営まれ、前方後円墳1基、円墳6基、横穴墓40基が分布する。さらに、東側の芳土地区から住吉地区にかけての丘陵部には70基を超える横穴墓から構成される蓮ヶ池横穴墓群や住吉古墳(前方後円墳3基、円墳1基、横穴墓55基)などが広く分布している。また、右岸域の丘陵地にも大淀古墳群や生日古墳群のほかにも食闇古墳(前方後円墳1基、円墳3基、横穴墓5基)や生日古墳(円墳6基、横穴墓15基)が分布する。

一方、古墳時代の集落については、西ノ原遺跡周辺では前述の多宝寺遺跡や竹ノ下遺跡で古墳時代後半(6世紀後半)の集落が確認されている。また、距離的には離れているが南東約4kmの左岸域の標高6mの微高地に位置する淨土江遺跡では堅穴住居跡25軒からなる5世紀後半から7世紀にかけての集落が形成されている。また、約4km南の右岸域の標高26mの丘陵地に位置する源藤遺跡では14軒からなる6世紀代の集落の形成が見られる。



第2図 地形図

註

- (1) 「街路生日通線改良工事に伴う発掘調査略報～大淀3号古墳・多宝寺遺跡・藤原寺遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第31集』宮崎県教育委員会（1988.3）
- (2) 「竹ノ下遺跡現地説明会資料」宮崎県教育委員会（1988.7）
- (3) 「宮崎市下北方古墳調査報告」「日向遺跡調査報告第1輯」（1952）
- (4) 「下北方地下式横穴第5号」「宮崎市文化財調査報告書第3集」宮崎市教育委員会（1977）
- (5) 面高哲郎「船塚古墳について」『宮崎考古第5集』宮崎考古学会（1979.10）
- (6) 「船塚遺跡」『宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書1』宮崎県教育委員会（1987）
- (7) 「淨七江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書第6集』宮崎市教育委員会（1981）
- (8) 「源藤遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』宮崎市教育委員会（1987）

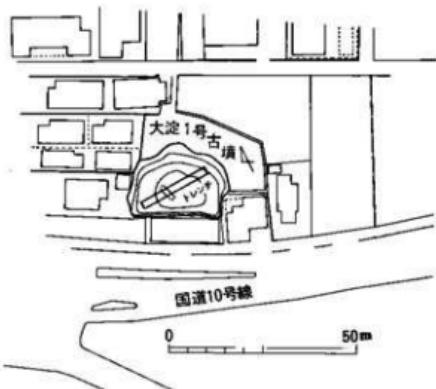
第2章 発掘調査の結果

第1節 大淀1号古墳の概要

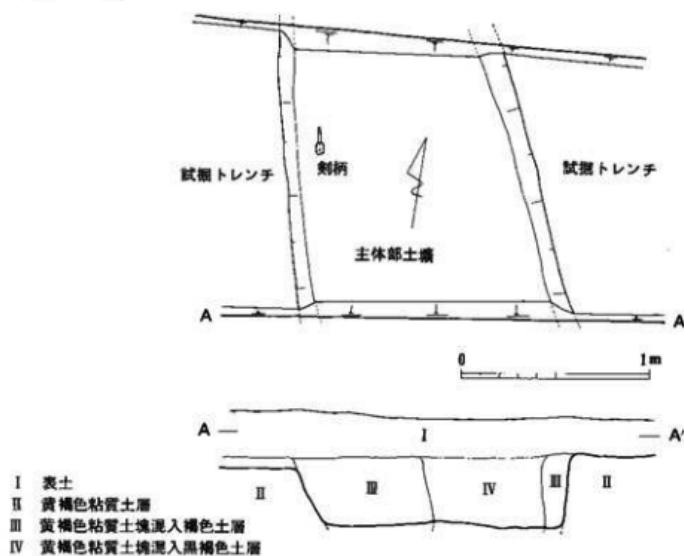
大淀1号古墳は径約27m、高さ約3mの円墳で、昭和12年に県史跡として指定されている。しかし、もともとは、前方後円墳であったものが指定以前に国道を拡張した際、前方部を削平したため、後円部のみが残存し円墳として指定したとされていた。

現況では国道に面した墳丘の南側は5分の1程度が垂直に直線的に削平を受けておりバイバス工事着工以前には民家が墳丘際まで建てられていた。また、墳丘の東側は国道側が5m程度大きくえぐられており、西側も民家が墳丘側を若干削平して建てられている。しかし、北側から東側にかけては墓地となっており原形をたもっていると思われる。墳頂部は大正年間に削平したため平坦な形状となっている。これらの現況は指定時の状況と余り変化は見られない。

主体部については宮崎市教育委員会が昭和57年11月におこなった現状変更による確認調査において粘土桿が検出された。それによると、現状の墳丘中央部よりやや西よりの位置に主軸をほぼ東西方向にもつ土壤の掘り込み部を確認した。土壤は幅約145cmを測りその埋土の状況から幅60cm前後の木棺墓の可能性が考えられる。土壤からは確認面から35cm程の深さか



第3図 確認調査トレンチ図
(縮尺1/1500)
(昭和57年宮崎市教育委員会調査報告の実測図に加筆・作図)



第4図 確認調査主体部遺構実測図及び主体部土層断面図
(縮尺1/30)
(昭和57年宮崎市教育委員会調査報告の実測図に
加筆・作図)

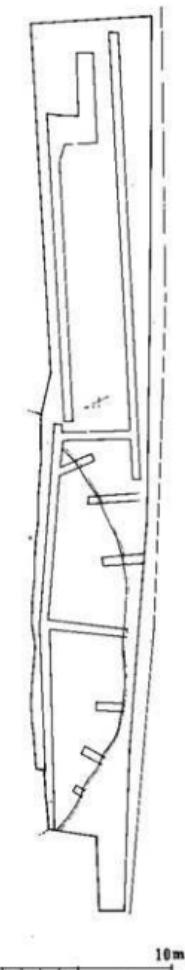
ら鉄劍の柄の部分が1点出土した。しかし、現状変更による確認調査であったため主体部が確認された時点で埋め戻し現状に復した。

第2節 発掘調査の経過

第2章、第1節で述べたように、現況からは大淀1号古墳が前方後円墳であることを立証する資料は得られないため、今回の発掘調査ではその立証も期待して臨んだ。そのため、調査区を墳丘の削平部分のみでなく東側の工事区にまで広げることとした。

発掘調査では、調査区がブロック類などの建築材を含んだ盛り土が一帯を覆う状態であったため、まず、重機による表土剥ぎを行った。さらに、西側の墳丘側の調査区については遺構等確認のための検出作業を行ったところ、墳丘側に古墳の基底部が完全に残存しており、南側の国道際で弧状に巡り墳丘崩れを思わせる落ち込みも確認された。そのため、この部分の埋土の除去作業を行う一方で、基底部にトレンチを7個所に入れてその状態を精査した。東側の調査区については東西方向に重機で幅1mのトレンチ2本を入れて土層堆積の状態を確認したが土層の状態に変化が見られなかったため、トレンチ幅をさらに広げて墳丘基底部の残存や周溝の有無について確認した。

発掘調査に際しては、調査期間がちょうど梅雨時期と重なったうえに、一帯が以前は水田地帯であった点や道路の傾斜などの諸条件から雨天時には調査区一面に雨水や排水が溜まり数日間は溜水が引かない状態が続いた。そのため排水作業にかなりの時間を費やした。



第5図 トレンチ配置図 (縮尺1/300)

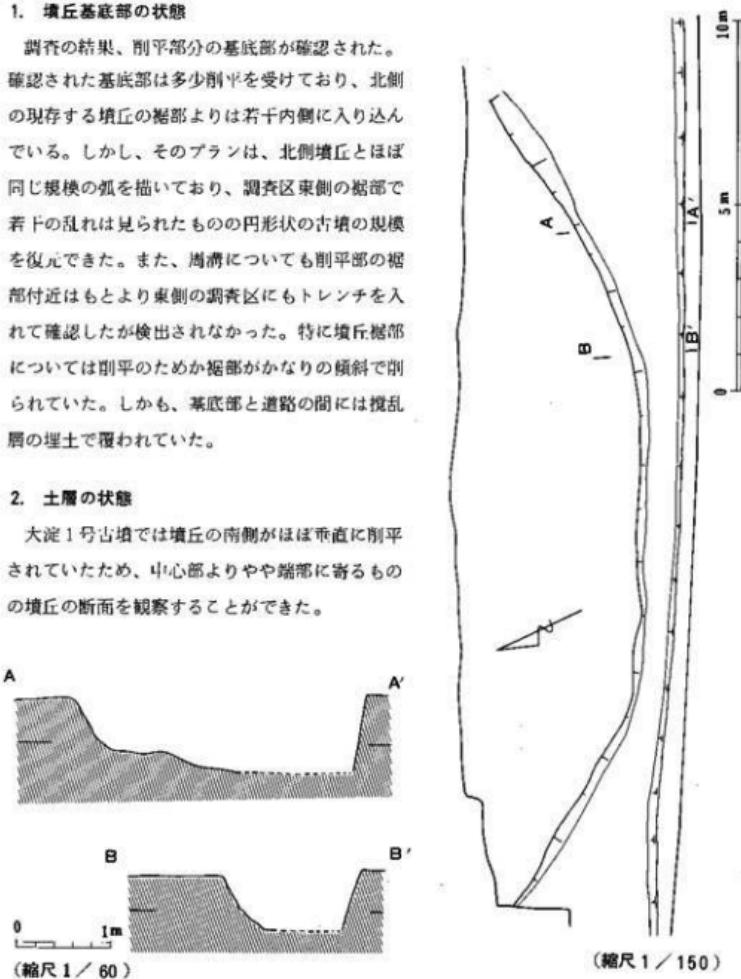
第3節 遺構と遺物

1. 墳丘基底部の状態

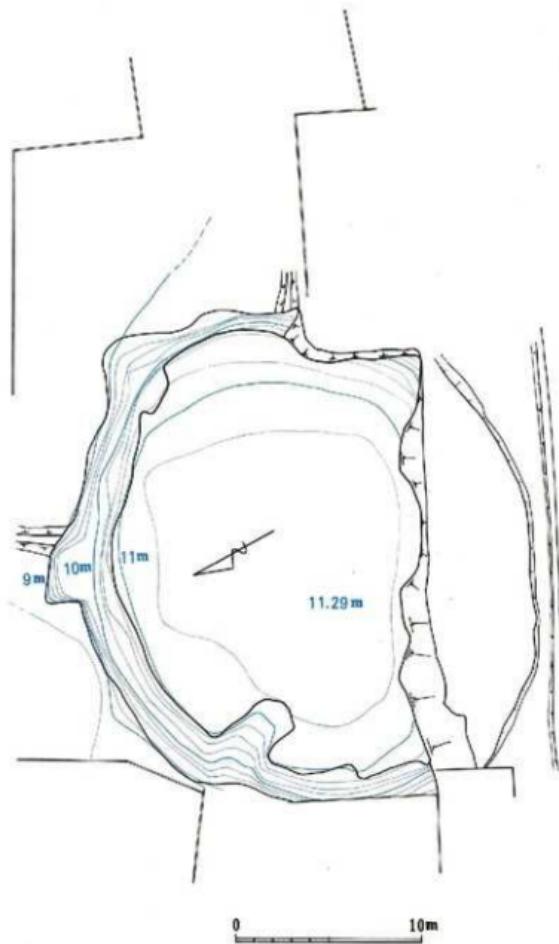
調査の結果、削平部分の基底部が確認された。確認された基底部は多少削平を受けており、北側の現存する墳丘の裾部より若干内側に入り込んでいる。しかし、そのプランは、北側墳丘とはほぼ同じ規模の弧を描いており、調査区東側の裾部で若干の乱れは見られたものの円形状の古墳の規模を復元できた。また、周溝についても削平部の裾部付近はもとより東側の調査区にもトレンチを入れて確認したが検出されなかった。特に墳丘裾部については削平のためか裾部がかなりの傾斜で削られていた。しかも、基底部と道路の間には搅乱層の埋土で覆われていた。

2. 土層の状態

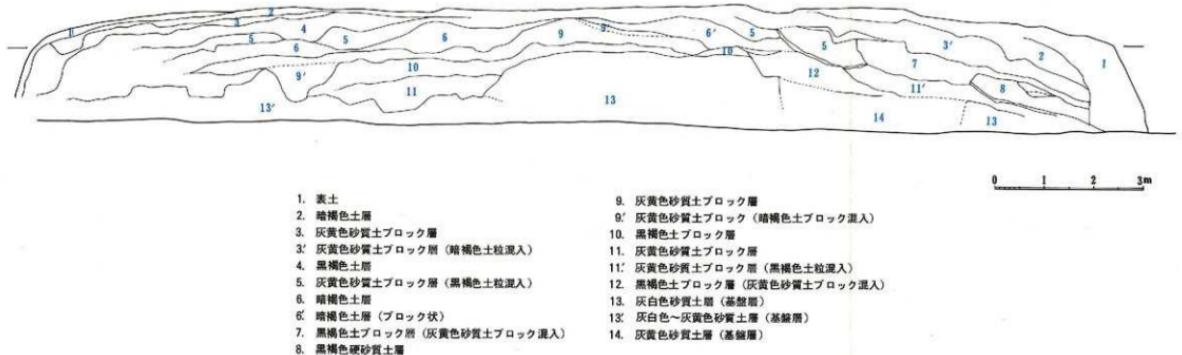
大淀1号古墳では墳丘の南側がほぼ垂直に削平されていたため、中心部よりやや端部に寄るものとの墳丘の断面を観察することができた。



第6図 遺構（基底部）実測図及び断面図



第7図 大津1号古墳墳丘現況図（縮尺1／300）
 （等高線は25cm間隔）



第8図 大淀1号古墳墳丘土層断面図 (縮尺1/80)

それによると、部分的に層の乱れはみられるものの、墳丘裾部からレンズ状に灰白色～黄褐色のシルト質の基盤層が中央部で高さ1.5～1.6mの厚さで見られる。さらに、基盤層の上部にシルト質の土層をベースに黒褐色土、灰黄色砂質土、暗褐色土の土塊を含む盛り土が10～40cmの厚さで交互にレンズ状に堆積している。墳頂部付近や両端の墳丘裾部は後世の段階での削平を物語るかのように土層が切られている状態がうかがわれる。また、表土の状態も墳頂部付近では堆積が薄くなり、裾部近くでは大きく乱れている。

調査区内については墳丘基底部の土層の観察もおこなった。墳丘削平面に沿って深さ60～100cmのトレンチとそれに対して放射線状に7本のトレンチ（うち6本は断面のみ）をいれて観察した。その結果、基底部下の土層の状態も墳丘の土層断面で見られたシルト質の基盤層からなっている。この基盤層は古墳の立地場所が大淀川下流域沿いの標高7～8の平野部低地であることから氾濫原などの低地帯等で見られるシルト質の基盤層である。調査区東側のトレンチでは褐色、黄褐色、灰色の砂土が5～20cmの厚さで相互に堆積する上層で一部に粘質の黄褐色土層が見られる。

3. 遺 物

今回の発掘調査では古墳に伴う遺物の出土はなかったが、古墳断面精査中に土師器片数点出土した。1は胎土中に石英と角閃石や0.5～2.0mmの砂粒を含み、黄橙色～浅黄橙色の色調の壺形土器か壺形土器の胴部片と思われる。2、3は糸切り底の土師器皿の底部の破片である。ともに石英と細砂粒を含む。1は古墳時代の土師器の可能性もある。2、3は中世のものである。



第9図 遺物実測図
(縮尺1/3)

第3章 結 語

今回の調査では、周溝の検出や遺物の出土はなく大淀1号古墳の詳細について明確な結果は得られなかった。しかし、削平部で円形状に基底部が確認されたことで、大淀1号古墳が円墳指定の古墳であるが一部に前方後円墳とする説があった点について後者の説を打ち消す一つの貴重な実証が得られたことになる。

また、今回調査の大淀1号古墳は市街地に立地し、しかも墳丘が削平され住宅地に隣接する古墳であることから、削平部の基底部については残存も危ぶまれていたが、基底部が確認されたことで市街地に立地するこのような古墳についても再開発等の際の確認調査の必要性が改めて認識された。

大淀1号古墳の道路に面した削平断面についてはこれまで住宅の陰で土砂の崩落や美観の面からの問題点はさほどなかったが、今回の西バイパス建設に伴い道路面に露出されることから土砂の崩落による古墳のき損や美観の点から削平断面の補修保護を目的として断面に芝の植え付けを行った。断面が急であり、基盤層が露出しているため芝の付きは悪いが数年後には芝が断面を覆った情景が見られるであろう。今まででは大淀1号古墳の存在や所在地を知る人もさほどはいなかったであろうが、今後は、西バイパス工事で姿を現したことを契機として大淀1号古墳の保護だけでなく文化財の保護啓蒙に役立てたい。しかし、現状のままで現実性に乏しくさらに充実した管理整備や古墳の存在をアピールする努力が求められる。このことは、県内に所在する古墳、ことにき損の状態にある古墳についてもいえることである。

なお、最後になりましたが、今回の報告書作成にあたっては昭和57年に宮崎市教育委員会がおこなった大淀1号古墳の確認調査等について、野間重孝氏（宮崎市文化振興課）に御教示、御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

図 版



大塚1号古墳填丘土層堆積状況

図版
2



大淀1号古墳及び調査区（南西から）



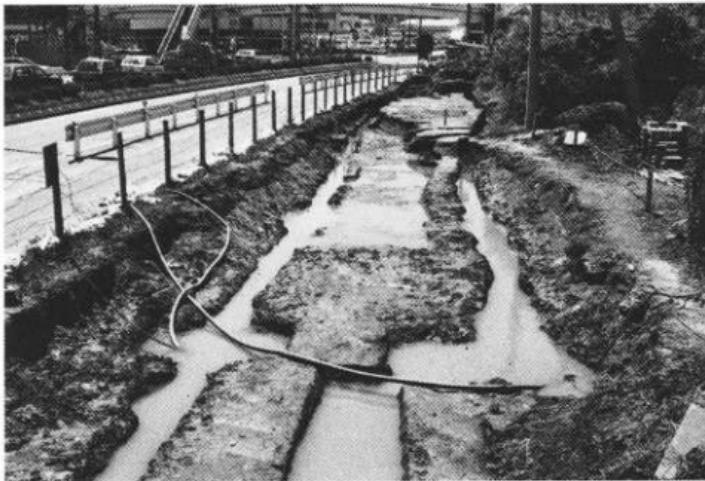
大淀1号古墳及び調査区（東から）



填丘基底部検出状況（東側）

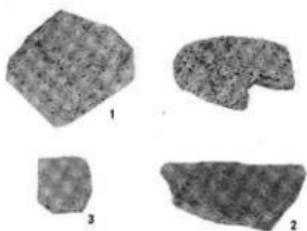


填丘基底部検出状況（西側）



調査風景

出土遺物



大淀 1 号古墳
填丘断面補修作業



大淀 1 号古墳填丘断面補修状況

一般国道10号宮崎西バイパス事業に伴う
発掘調査報告書

NISHI HARU

西ノ原遺跡

OOYODO

－大淀1号古墳－

発行年月日 昭和63年12月

発 行 宮崎県教育委員会

編 集 宮崎県教育庁文化課